Osaka University Knowledge Archive

Title	重症筋無力症における胸腺摘出効果に関する研究 : 組織学的ならびに電気生理学的検討
Author(s)	姜, 進
Citation	大阪大学, 1977, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31980
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【23】

氏名・(本籍)	姜(きょう)　進(すすむ)
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	第　4031　号
学位授与の日付	昭和52年7月27日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**重症筋無力症における胸腺摘出効果に関する研究** **——組織学的ならびに電気生理学的検討——**
論文審査委員	(主査)教授 西川　光夫 (副査)教授 岡野　錦弥　教授 岩間　吉也

論文内容の要旨

〔目　的〕

重症筋無力症（MG）における胸腺摘出の効果を評価する目的で，胸腺非摘出MG患者群（非摘群）の臨床経過を対照に胸腺摘出MG患者群（胸摘群）の術後過経を検討した。さらにMGにおける胸腺異常の意義を解明するべく摘出胸腺の組織所見と術後経過および誘発筋電図所見との関連を検討した。MG に Basedow 病が比較的よく合併するが，両疾患の関係を解明することも目的とした。

〔対象ならびに方法〕

対象MG患者は124例（男43，女81），Basedow病合併は12例（男3，女9）である。胸摘群65例（男21，女44），うち16例（男11，女5）は胸腺腫症例である。臨床経過の判定はMG状態の最悪時（胸摘群の場合は胸腺摘出以前の最悪時）と経過診断時の二時期におけるMG症状数および抗 cholinesterase 剤の服用量の比較により行い，寛解，著明改善，軽度改善，不変，悪化・死亡に分類した。胸腺の組織学的検索は germinal center（GC）形成の程度を中心に行った。GCの程度は，髄質に全く変化のないものを0度，リンパ球集簇のみをみとめるものを1度，1切片中に稀にGCがみられるものを2度，1小葉に1コ以上GCがみられるものを4度，2度と4度の中間を3度とした。誘発筋電図検査では神経反復刺激による口輪筋および小指外転筋の筋活動電位の waning の有無について検討した。

〔成　績〕

現在に最も近い終診時における臨床経過の検討では，寛解例は胸摘群では12例で，非摘群の1例に比し有意に多くみられた（$P < 0.01$）。また著明改善を含め良好な経過をとる症例の割合も胸摘群では60%で，非摘群の35.6%に比し有意に高かった（$P < 0.01$）。胸摘群において種々の臨床因子別

に寛解・著明改善例の割合をみると，性別では男性群，発症年令別では30才以上の群，発症から手術までの期間別では期間の短い群に高率であった。

胸腺ＧＣは胸腺種（－）群の79.6%の症例にみられた。各臨床因子別にＧＣ出現頻度をみると，女性群，30才未満発症群，発症から手術までの期間が長い群に高率であった。ＧＣ程度と術後経過の関連では，ＧＣ０～１度群における寛解・著明改善例の割合は 100%で，ＧＣ２度群の63.6%やＧＣ３～４度群の50%より高率で，ＧＣ程度と術後経過の間に推計学的に有意の関係がみられた（$P<0.02$）。またＧＣ０～１度群では術後早期に寛解あるいは著明改善する症例が多いのに対し，ＧＣがみられる群特にＧＣ３～４度群では術後良好な状態に改善するまでにかなりの時間を要する傾向がみられた。胸腺腫（＋）群では寛解・著明改善例の割合は術後３年までは漸次上昇するが，３年以降は逆に下降する傾向がみられた。

術前における誘発筋電図所見とＭＧの臨床像との関連については，口輪筋 waning は球症状を有する症例の83.9%にみられ，臨床像とかなりの相関がみられたが，小指外転筋 waning は四肢症状を有する症例の56.6%にみられたのみである。しかし，小指外転筋 waningの出現頻度は寛解群やＧＣ０～１度群では低率であり，術後経過やＧＣ程度との間に関連がみられた。

Basedow 病合併12例中11例は Basedow病の発症が先行していた。大部分の症例は甲状腺機能亢進時期にＭＧ症状は最も強く，Basedow病の治療による甲状腺機能の正常化に伴ってＭＧ症状の改善がみられた。しかし非摘群では寛解例はないのに対し，胸摘群では５例中４例が寛解で明らかに良好な成績を示した。なお胸腺ＧＣは５例中２例（40%）にみられたが，ともにＧＣ程度は２度であった。

〔総　括〕

胸摘群の術後経過は非摘群の臨床経過に比し有意に良好で，ＭＧ治療における胸腺摘出の効果を確認した。胸腺ＧＣの程度は術後改善の時間的経過と密接な関係を有しており，したがって，胸腺ＧＣが術直後において予後を推測する上で有用な指標になりうると思われた。小指外転筋における誘発筋電図所見はＭＧの臨床像と必らずしも一致しなかったが，術後の経過や胸腺ＧＣの程度と関連があり，術前に術後の経過を予測する上で一つの情報を提供するものといえる。ＭＧ症状と甲状腺機能状態の相関をみとめたが，甲状腺機能の正常化のみではＭＧの寛解はみられず，やはり胸腺摘出が必要になるものと思われた。

論文の審査結果の要旨

本研究は重症筋無力症の治療として胸腺摘出が薬物単独治療に比べ明らかに有効であることを長年にわたる多数の症例から示したものである。またその際の胸腺髄質の germinal center 形成の程度が予後と密接な関係を有すること，及び術前における尺骨神経誘発筋活動電位の waning の有無が術後の経過と密接な関連があることを明らかにした。さらに Basedow病に合併した筋無力症状は 甲状腺治療によりかなり改善するが完治に至らず，胸腺摘出によりはじめて寛解しうることを認めた。以上の知見は筋無力症治療に貢献するところ大である。